

546

H3.2.6

H11.4.24

支那 1005°

取り仕切る 1629°

3,032°

元神前394(記)

紀上330°

608° 609°

息浜 349°
息長 343°

版
息浜
息長
参照

前記によれば、神功皇后の父は、
息長宿禰王

息長宿禰王

息長氏と息長宿禰王との間に、格別な関

連性があるのかどうかは、
分らない。

後の二世紀末頃に神功皇后の父(息長宿禰王)

か、そして四世紀末頃以後に稚野毛二派皇子

の子孫(息長氏)が、
博多湾東岸の

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

息浜に居住していた

湖東岸へ遷したのかも知れない。詳細は分からない。

H4.8.13(日)

202P
記(書) 225P
記(下) 543P

187Pキ

3,033P

五男 紀上 456頁
「2237」
⑤ 3036 1/2
紀上 436P
記(書) 225P
二馬

おほなせのみこ
紀上 452P 39行 大泊瀬皇子 五男 紀上 456P 雄略即位前紀
「2237」
紀上 436P
記(書) 225P
おほなせのみこ
紀上 434P
440
いんぎょう 紀上 250P

た。 (第1表参照) 允恭皇后忍坂大中姫は、木梨
の皇子・安康天皇・雄略天皇など、総勢九人
の皇子・皇女を生んだ。
大泊瀬皇子(後の雄略天皇)は上から七番
目の子であつた。(允恭記・允恭紀・雄略紀参照)
だから、大泊瀬皇子にとつて、母方の血筋
である稚野毛二派皇子の家系は、極めて身近
かなものであつたと思わゆる。
さて、これから少々ややこしいことを述べ
ていきたまいたい。
母「忍坂大中姫」の兄である「意富々等王」
「大泊瀬皇子の従兄弟」には「汗斯王」と
いう子があつた。(応神記末尾・日本書紀(下)日本書紀文学大系
あるいは、大泊瀬皇子と、
あつた。 (第1表参照) 允恭皇后忍坂大中姫は、木梨
の皇子・安康天皇・雄略天皇など、総勢九人
の皇子・皇女を生んだ。
大泊瀬皇子(後の雄略天皇)は上から七番
目の子であつた。(允恭記・允恭紀・雄略紀参照)
だから、大泊瀬皇子にとつて、母方の血筋
である稚野毛二派皇子の家系は、極めて身近
かなものであつたと思わゆる。
さて、これから少々ややこしいことを述べ
ていきたまいたい。
母「忍坂大中姫」の兄である「意富々等王」
「大泊瀬皇子の従兄弟」には「汗斯王」と
いう子があつた。(応神記末尾・日本書紀(下)日本書紀文学大系
あるいは、大泊瀬皇子と、

岩波書店 五四三頁 補注一七一(参照)

おはかえ 300
いんち 人知を似てはいる 伝451「神」
人知伝 1157「人向のちえ」

3,034^P

そくばく 伝 1303^P
東傳

汗斯王とは、ほぼ同くらい年の恰好であつ

たかも知れない。

母に連れられて訪ねる母の実家では、一族
中の者達が、大泊瀬皇子を暖かく迎えてくれ

た。

そこには、宮城内と違つて、魅力的で広
大な自然があり、わくわくするような自由が

あり、そして汗斯王がいた。

馬をたくみに乗りこなす野や山を駆け
ゆく二人の少年の瞳は、キラキラ輝いてい

た。

だがこの当時、長兄木梨輕皇子をは
めとする四人もの（同母）兄を持つ大泊瀬皇

子に、まさか皇位が巡つてこのようなとは、
誰にも予想でしなかつたであらう。

まして、

大泊瀬皇子（雄略天皇）の遺詔により、
汗斯王の子が西の天子に擁立される時がやっ

てくる

などとは、全く思い及ぶ筈がなく、
人知を以て推し割り得ないことだ。

（＊）

あす4
阿曇 紀上95'558^P 字27^P 別即紀下18'1213
ミオ 地名所1468^P 高嶋部上安曇あり地名所51^P
311は303302-381 ①3049^P

心神天皇の血を引く汗斯王「彦主人王とも
 ういう」は、その高貴な身分故に、やがて別邸
 三尾の別邸^{ミオ}を持つほどの役職に着いた。
 なお、三尾^{ミオ}崎^{サキ}か近江国滋賀・高嶋二郡の境
 にあり、「現在^{マダ}」高嶋町大木尾、安曇川町
 に三尾里という字があるで「存する」（『萬葉集』）
 （二）日本古典文学大系、岩波書店、三八頁一七三三の注参照
 「阿曇の連の本拠地」、つまり、筑前国志賀島
 のように見える「海の中道」の先端^{セントウ}下尾^{シモビ}
 志賀島^{シガノシマ}にあるたのかも知れない。
 汗斯王か、その三尾の別邸に居たとす、
 「たらこう告げる者かい」^{タラカウツケルモノカイ}（たのではないか）
 稚野毛二派皇子の子である意富々等王^{ニハノモリノミコデアルイトフタナリノミコ}（
 まり）神武天皇の祖父とされる房火火出見尊^{ヒロヒホヒデミノミコ}
 は、志賀島の綿津見神の娘・豊玉姫を娶う小
 たのでした。（神代紀下第十段本文参照）
 また、意富々等王の子である乎非王は、豊
 玉姫の妹・玉依姫を以て妃とされ、
 （神代紀下第十一）段本文参照
 汗斯王様の家と、阿曇家とは「系」
 深いつながりがあるのです。

紀下18^P
注4

たいご

継体即位前紀参照

114.8.15 生延
上野

紀平18° ④4906P 三星
宇治上319P 計49°
三國→紀下20°5分

元禄536° 天智天皇の都 -
小計232° 3.036P - 1/2

「かなから」④3022° 映
地8°1476°

④1594° 1/2 重仁の孫をたむ
自合1594° 1/2 重仁の孫をたむ
「あま」はあま
紀下20° 伊支馬
伊支馬の
④3039° 8
6分

ところ、で汗斯王様。我が阿曇家から三國
の坂中井の高向に嫁に行った妹が、
天皇（垂仁天皇）は伊勢島の祖の七世の孫に
当る。曰振媛と曰す女子を生んだのでした。
振媛の顔容は姝妙しく、端麗で、それはす
は美しゅうございます。〔継体紀冒頭参照〕
なお、筑後国三井郡に三國と
ある。（「帝國地名辞典」大田為三郎、名著
出版、三國参照）
なお、三國と、国と、いう文字には、
という意味がある。（「云辞苑」等参照）
も、かいたら、三國は、御国のこと
であって、後代の、大宰府の、
かも知れない。（「云辞苑」等参照）
ともあれ、
汗斯王は、筑前国の志賀島の三尾
の別邸から、阿曇氏を使者として、使を遣
わし、三國の坂中井に（お住まいになつてお
られる）振媛を（迎え、召し入れて）妃とさ
し、と解いた。

振媛は、幾人かの男の子を生んだのち、
遂に、彦太尊（リ乎富等大公王・継体天皇）
をお生みになつた。（継体紀冒頭参照）
尚、この物語では、
（リ乎富等大公王と、後期継体天皇ともいう）
ハキ神日本磐余彦火火出見天皇（すなわち神武
天皇）とは、同一人物なのであろう。✓
と考えたい。（第1表参照）
つまり、神武天皇へ至る系譜と、継体天皇
へ至る系譜とを、第1表に示すように対応させ
て考えてみたい。

*

* 「大公」は、君主の御一門なる男子の称で
ある。という。→ 「大字典」上田万年「講
談社」大公（参照）

電 人も数人

たいこう
大公
たかの 500
君主の御一門
なる男子の称

紀上162^P 紀上162^P 紀上167^P 3,037^P

紀(上)106^P 紀(上)185^P 注16 紀上172^P 井上(上)162^P

玉依姫(振媛)
とはいえ、よく知られており、通常、
彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊は、母豊玉姫の子として生れた
つまり姨に当る。玉依姫を娶って、神日
本磐余彦尊(神日本磐余彦火火出見尊、神武
天皇)をお生みになつた。下第十段、十一段
と解説されてゐる。(神代記・神代紀参照)
とすれば、神武天皇の母は玉依姫であ
つて、振媛ではないようにも思える。
そこで以下、玉依姫についてみて
みることにしよう。
タマは、生命力。ヨリは、馮りつく意。
タマヨリは、タマの馮りつく人。玉依姫は固
有名詞ではあるが、神代記下第十段本文
紀下第九段第七の一書に「高皇產靈尊の兒萬幡姫の兒玉依姫命天
忍骨命(天忍穗耳尊。天神天皇の)ことであ
う」の記と爲りて、兒天彦杵火火置瀬尊を生
みまつる

新反10所
ようた

(こと)

前頁末

3,038^P-1/2

稚野毛二派皇子

5576^P-1/2

(赤) 2871-1/2 同反

(青) 2866 タイム

山神7年大御花子

3039^P

とある。〔日本書紀〕(上)日本古典文学大系
岩波書店、一六七頁、注一五参照)
■なお先に、第四十八章火の中なかにから生うれた
彦火火出見尊ひこほでみのみこと〕(無理やりつないだ系譜)の
項において、
□神話中の天忍穗耳尊あまの忍みみみみことの兄みこと曰い (天) あま之杵のき火火ほほ
置頼尊おきせのみこと曰い
□人皇の御世の応神天皇の兄みこと曰い (稚) わか野毛二
派皇子まだのみこ曰い (継体天皇の祖) けいたいてんのそ
の二者は同一人物なのであろう、と述べた。
■もしもそうだとすれば、
へ応神天皇は、玉依姫命たまよりひめのみことを妃みめとして、稚野
毛二派皇子けふたまたのみこ (継体天皇の祖) けいたいてんのそをお生うみになっ
た✓
ということになる。
→
■ともあれ、稚野毛二派皇子から、継体天皇
へ至る血筋には、曰い 玉依姫たまよりひめ曰い 加深かふみくかかわ
っているようである。
■ここに、想像をたくましくするとき、

「万葉集事典」頭の24p 小林34p
紀上185³⁵ 平はヲ、於はおとあ 大カマ 48p
③3,255-7 3,038^P-2/2

大カマ 1142p とままひめ
柿栗漢 紀上184⁹ 95行
紀下543³⁵ 前項17行、前項6~10行

へ稚野毛二派皇子の母や、子孫の妃は、皆
本来の名前のほかに、
う愛称でも呼ばれたの
と思われる。
①稚野毛二派皇子（天正杵火火置頼尊）の母
は、口玉依姫たまよりひめなのであろう。
②稚野毛二派皇子の兄意富々等王（彦火火出
見尊）の妃豊玉姫とよたまひめが亡くなられたので、
豊玉姫の妹の口玉依姫たまよりひめが姉に代わって彦波
瀲武鸕鷀草葺不合尊はきりひきあへずのみことへ意富々等王の妃は、
非王みみ不合王あひみのことに解した」を養育さ
れた、と考えてみよう。
＊なお、口玉たまは、口くち於おと同一に用いら
るという。（「漢和辞典」小林信明、小学館
三四頁。「万葉集事典」佐佐木信綱、平凡社
へ万葉仮名一覧（於・乎）参照）
③彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊へは、乎み非ひ
王のことに解した」は、豊玉姫の妹口玉依
姫たまよりひめを以て妃とされたの
（下）第十一段本文参照）
（神代紀）

紀上185³⁵
および玉依姫たまよりひめ

天改行

紀上185^P

3,039^P-1/4

平富等大公王 3036-2/2 259
3031^P 259

④また、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊（ここでは、
乎非王の子の汗斯王のこゝと解いた）は、
曰玉依姫（つまり、振媛）であらう）
を妃として、乎富等大公王（继体天皇）をお
生みになつた、と察せられる（神代紀下第十
一段本文参照）
すなわち、
・乎非王の兒汗斯王は、曰振媛を娶つて、
曰玉依姫とお呼びになつた。
・そして、曰玉依姫（振媛）が、继体天皇
（後の神武天皇）を出産された、
といふことなのかも知れない。
■このようなわけで、神代紀（下）第十一段本文
には、神話としてもつともらいく、また後文
へとつなぐ為
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、其の姨玉依姫
を以て妃としたまふ。彦五瀬命を生ませり
次に稻飯命。次に三毛入野命。次に神日本磐余
余彦尊（後の神武天皇）。凡て四の男を生す
と記されたように推察される。

天つき改行

次頁から

第 408 図 上辺中央

第

第 408 図 中央のやや西南

また、筑紫郡太宰府町北谷の竈門神社は、

玉依姫を祀っており、その社伝に、

玉依姫は、神武天皇を産みまして、後ち

竈門山に降臨し給ふ

とある。一日本社寺大観し名著刊行会へ竈

門神社参照

定かでないが、

一玉依姫は振媛は、夫である汗斯王

かえりなつたとき、一故郷の竈門山あた

りへ帰ってきて、継体天皇らを養育された

ということを示唆しているように思われる

3039^P 3/4

- ・ カラー
- ・ 頁の上半分
- ・ 頁の下半分に
次頁の図を載
せる

- ・ 出来るだけ
明るくおいて
下さい。



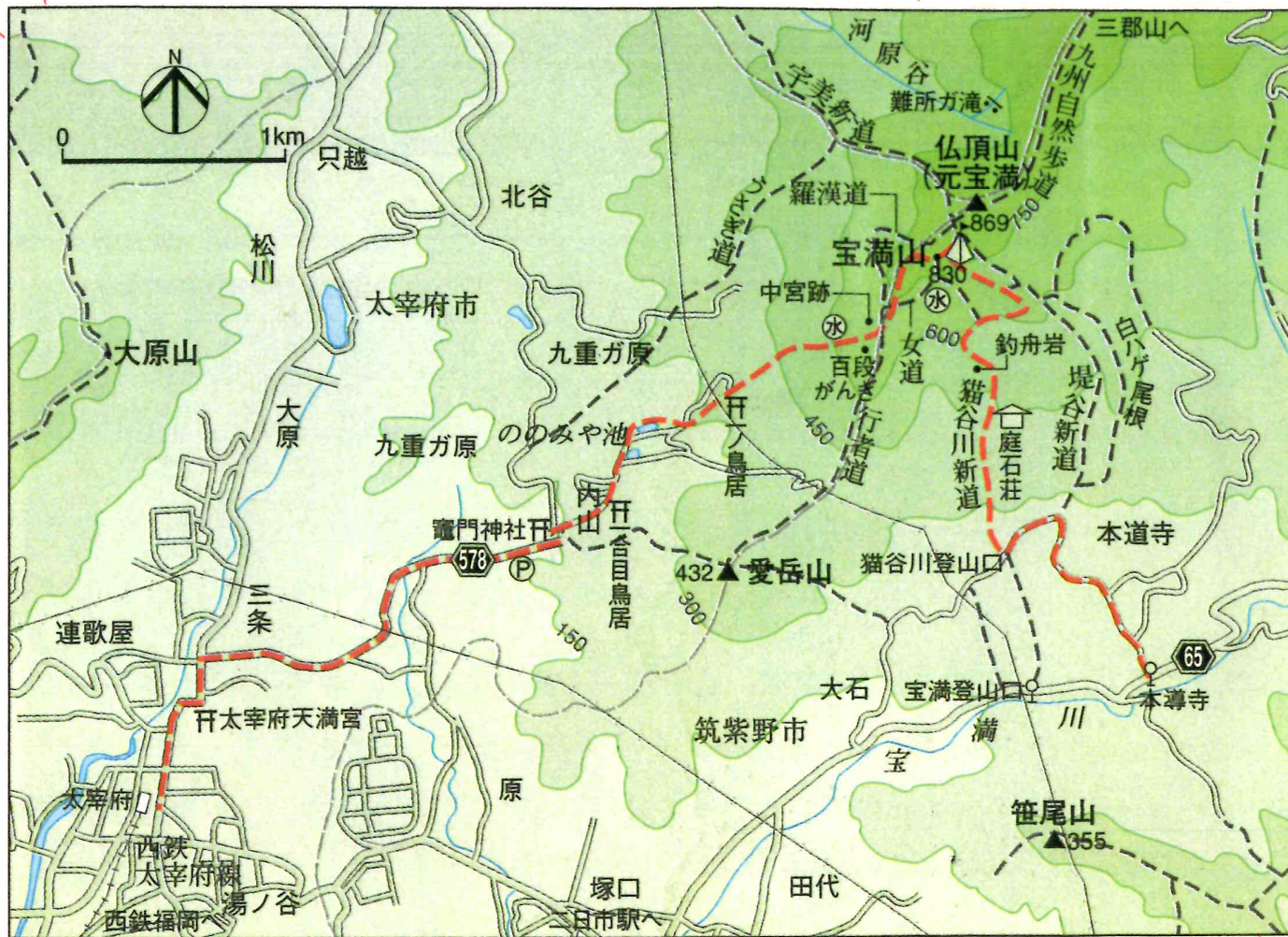
中心よりわけ 140G 写真図版 567 ^{かまどやま} 龍門山 (御笠山とも ^{みかきやま} 宝満山ともいう) ^{ほうまんざん}

130G 『九州百名山』 山と溪谷社 2002年8月1日発行 12~13頁参照。

- 120G 西側からは ^{かま} 龍 (釜) ^{かま} を ^ふ 伏せたように見える。

- ・カラー
- ・前頁の写真の下に、この図を配置する。
- ・頁の下半分。

(重要な図です)



13QG

14QG

第408図

かまといやま みかさやま ほうまんざん
 龍門山 (御笠山・宝満山) 周辺地図

『九州白名山』山と溪谷社、2002年8月1日発行、12頁参照。

紀下34⁹
由3040² 46^{12.5}

③3040⁹-³/₄ 同又

紀上167⁹
注15

③3,040⁹-¹/₄

普通名詞③3253⁹ 凡上414⁹ 416⁹ 1⁹ 小林
由3040⁹-⁵/₆ 矢691⁹

上賀茂神社・下賀茂神社

一方、山城国風土記逸文に見える賀茂神社

(上賀茂神社・下賀茂神社)の伝承に

神武天皇の東征の際に先導した賀茂建角

身命の娘である曰玉依日賣は、丹塗矢(赤

く塗った矢で、男神の霊代。男根の象徴)の

子を孕み、男子を生んだ。

いりゆる丹塗矢は、乙訓の郡の社に坐せる

火雷神(ほのかつちのかみ)である。

男の子は、外祖父のみ名に因りて、可茂別

雷命と號けられた。

なお、継体紀十二年条に「(継体天皇は)遷りて弟國に都す」と記されている。

もーかーたら、

火雷神(丹塗矢)とは、曰彦火火出見

尊(神武天皇とも、後期継体天皇ともいう

べき倭王)のことなのではなからうか。

火雷神(継体天皇)の妻曰玉依日賣は

男子を生んで死に死する等の何か特別の

だ後のかなり早い時期に死に死する等の何か特別の

③3040⁹-⁵/₆ 4⁹
(最初の正妻)であった

3,040^p - 3/4

と想像され
③ 3040^p - 3/4
1299

前12行

次頁から

事情があったため、
外祖父のみ名に因^なって、可^{かも}茂^わ別^{べつ}雷^{らい}命^{めい}と號^なけら
れたのかも知れない、
などと想像される。
参考までに、種々述べてみよう。
① 継体紀十二年三月九日条に、
こう記されている。

凡士記 415^p 注22
日本社 258^p 260^p

上賀茂神社 日本社 258^p
日本社 3^p 3040^p - 3/4
日本社 3^p 3040^p - 1/6 4^p

3040^p - 1/6 12^p
3258^p - 3/4
同又

凡士記 415^p 注22 3040^p - 1/6 4^p
日本社 258^p 260^p

3040^p - 1/6 4^p

部) ✓ の項において詳述したい)

こゝにいたことから推して、
へ山城国風土記逸文に記されている火雷
神は、後期継体天皇というべき日火
火出見尊は神武天皇、すなわち日男大迹
天皇は継体天皇のことなのであろう。
と考えてみたい。(第1表参照)

■ そうしたわけで、
① 火雷神(継体天皇)の御子である日可茂別
雷命は、篤く敬われ、後年、京都市

上京区の賀茂別雷神社(上賀茂神社)の祭神
として祀られ、また、
② 可茂別雷命の外祖父日賀茂健甬身命および
母日玉依姫命の二人が、京都市左京区の賀
茂御祖神社(下賀茂神社)の祭神として祀ら
れることになった。たのめあろう、
と思われる。(「風土記」日本古典文学大系
岩波書店、四一五頁、注二二。日本社寺大
観) 名著刊行会へ上賀茂神社・下賀茂神社
参照)

欽明天皇 继体天皇の皇子なり紀下62
本朝月令云2057P
賀茂祭、賀茂の祭459
3040-4/4
3039-3/3 定かた

などと想像され
3040-4/4
3153 3157 中雨の母
3258-3/3
3279 五ノ鈴

重祚 1455
3258-3/3
3279 五ノ鈴

せいひ 神林536
正妃 本妻 正妻
3279 五ノ鈴

こと

また、言わすもかなのことなから、
①山城国風土記逸文中の「玉依日賣」は、
体天皇の「最利」の正妃だったのかも知れない。
②だが、继体天皇正妃の「玉依日賣」は、
男の子を出産した後のかなり早い時期に、お
亡くなりになったたのではなからうか。(既述)
数十年前後、……继体天皇が重祚され、日神
武天皇として天上の国(九州)から日辺日
本国(近畿)へ「降つてゆかれる時」に、玉依
日賣の父である「賀茂建角身命」が先導したの
であらう。
なとと「想像される」
定かならないこと
なお、
「上賀茂神社・下賀茂神社の祭礼」とし
て古来有名な「葵祭」(賀茂祭)は、社伝に
よると「继体天皇の御子の」欽明天皇の御
世に創始されたといひ、
氏本系帳にもそのように記されている。
「日本史辞典」東京創元社、へ葵祭参照

3040 2/6 未

賀茂由緒 425 百科 6-309 日本史 198 3313
 賀茂由緒 425 百科 6-309 日本史 198 3313
 賀茂由緒 425 百科 6-309 日本史 198 3313
 賀茂由緒 425 百科 6-309 日本史 198 3313

賀茂神社は、平安遷都の後、王城の守護神
 として尊崇され、朝廷から伊勢神宮に準ずる
 手厚い殊遇をこうむった。
 桓武天皇は延暦十三年（七九四）十月に
 平安京へ遷都した直後の十二月、賀茂神社へ行幸
 され、皇城镇護の神として御崇敬の範をお垂
 れになった。
 これより後、賀茂行幸は歴代の例となり、天
 皇・上皇の参詣は数十次におよんだ。
 また、賀茂祭（葵祭）前日の摂関家の賀茂
 詣の時には、賀茂祭とほとんど同じ行事が盛
 大にとりおこなわれた。
 そして、嵯峨天皇の皇女有智子内親王は、
 弘仁元年（八一〇）、斎王として賀茂神
 社に奉仕された。
 これを、伊勢神宮の斎宮と区別して、
 斎院とよぶ。
 以後、歴朝相承け、登極（即位）の初めに

H30(2018) 8.6(月) ~ 87(4回)

H17.4.22 (金) AM10:00

考え (ニ)

3.04/1-2/3

おめでた
表立つ 329
3313P

百科⑥-309
日本史 198

ほうし 2015
奉祀 おまつ
おまつ
おまつ

は必ず、皇女、皇孫女、あるいは世王をして
奉祀せしめられたという。(「賀茂別雷神社
由緒略記」賀茂別雷神社社務所、四七八頁、
一七頁、七三頁)「日本史辞典」東京創元社
「賀茂神社」世界大百科事典「平凡社」
「賀茂神社」等参照
察すると二、三、
へ表立つては言えなかつたにても、
いって、よほど深い由縁があつたのであろう
と思われ。
我が国の往古の人々は
へ古公曾父の長子、
と二、三、
誇りといたつたようである。(既述)
そこで同様に
へ継体天皇の長子が祀
賀茂神社を尊
崇すべきである
と考えたのかも知れない。

*

令和2(2020)11.28(土)~12.1(日)

秤 ⑤ 3040¹-2/6

3,041^P - 3/3

④ 3050^P 20行 ~ 15主の
⑤ 3253^P - 1/2 ~
一事主 (ひよこはね)

(有) 3255^b
 (有) 3263^p
 紅 466 綠

$$42 \pm 240^\circ$$
$$\frac{11}{30} \overline{) 12 \frac{11}{29}}$$

さらには「崇神紀七年八月条には、
 「大田田根子に問ひて曰はく、曰汝は其れ
 誰か子ぞ」とのたまふ。對へて曰さく、「父
 をば大物主大神と曰す。母をば活玉依媛と曰
 す。陶津耳の女なり」とまうす。云々」
 とある。

大物主大神と、活玉依媛との間に生れ
 た大田田根子とは、一体誰のことであらうか
 ・ここで述べる煩雑になるので、追って

思うところを述べたい。

参考「ワタミタ」としたい。(第六十五章に
 おいて「考察したい)

＊なお「陶津耳」のミミは男子の尊称。ス
 「上は地名か」という。(「日本書紀」(上)「日
 本古典文学大系」岩波書店「昭和四十三年六
 月十日第二刷発行」二四一頁、注一八参照)

予
め
球
へ
る
と

こうきょ

前頁戊